

水草の集いに参加して

山崎 真実

(北海道大学農学部修士課程)

去る8月19日～20日にかけて水草研究会第22回全国集会在宇都宮にて開催され、初めて参加させていただきました。

19日は午前中に栃木県立博物館にお邪魔して標本を閲覧させていただき、自分の研究対象であるコウホネ属の標本とその他水草標本を見せていただきました。今回の大会事務局でいらっしゃる野口さんの御名前をラベルの中にたくさんお見受けいたしました。宇都宮周辺で精力的に水草を採集しておられるようで、どのような方なのか…と午後からの大会に期待が募ります。

博物館で若干長居をしたせいか、大会開始時刻に遅れてしまい、会長のお話を途中からお聞きすることになりました。会場にはちょうどよい人数がおさまって、見やすく、聞きやすい広さの教室だったと思います。受付では冷たい飲み物も配られて、北海道から宇都宮に出てきた者にとってはうれしいお心遣いでした。

さて、講演です。演者は大学や公的試験研究機関の研究者、環境アセスメント関係の方、趣味（既にこちらが本業になりつつある？）で研究されている方…と多彩な顔ぶれ。演題もフロラから保全生態学まで様々な取り合わせで聞き応えがありそうです。私は北海道のフィールドしか見たことがないので、どうしても頭の中のイメージは北海道になりがちなのですが、本州各地の水草の様子をお聞きしながら直感的な部分もありますが北海道と重ねて考えてみたり比較して考えてみたりと、有意義な時間が過ごせました。

まずはじめの神谷さんと國井先生の講演では、リュウノヒゲモが水鳥に喰われることにより生長に影響が出ることや、冬に悪化した水質を夏にリュウノヒゲモが浄化するというお話でした。北海道

では、オホーツク海岸の汽水湖である瀧沸湖の湖岸にかなりの量のリュウノヒゲモが生育している場所があるのを見たことがあります。オホーツク海岸の湖沼はハクチョウ等、渡り鳥の中継地として知られていますが、今回のお話のような水鳥と水草の関係があるのかも知れません。

次に薄葉さんの「尾瀬沼の水生植物相」についての講演では、尾瀬のように研究者がたくさん入ってきた場所でも未だ記録されていない水草がある、ということと広範囲に及ぶ地域のフロラ作りには時間がかかるということを改めて知らされた気がしました。ササエビモとエゾノヒルムシロの構造上の違いについてのお話も大変参考になりました。

その次の講演は櫻井さん達の「美々川流域の水生植物」についての講演でした。私がするまでもないのですが、美々川の紹介をさせていただくと…空路で北海道にいらした経験のある方は御存じかもしれませんが、津軽海峡を渡りきって“北海道大陸”の上空に入って程なくすると眼下に見えてくる湖がウトナイ湖、さらに千歳空港に向けて高度を落として行く間ずっと見えている蛇行した川が美々川です。美々川は源流部に湧水のある河川ですが、千歳川と比べると小さな河川で、ウトナイ湖に流入する主な河川として知られています。講演の中でもおっしゃられていたように、橋が水草観察ポイントで、流水中にバイカモ類、コウホネ、ミクリ属植物等が観察できます。私が見たポイントでは、花を付けているミクリ属植物はほとんどなく、沈水状態もしくは水面にたゆたう状態のものが大半でした。今回の講演では水位変動と水草の関係を述べられていましたが、抽水状態になることができず花を付けるところまで成長しきれないのは、講演でおっしゃっていたような

水位変動が周期的に起きているからだろうか？と思いました。しかし、そんな単純なメカニズムではないのかもしれませんが。

北海道には代表的な河川・湖沼でさえ水生植物相については未調査のところが多いため、まだまだ“水草未開の地”です。一方で都市部や農村部の小さな沼はどんどん消えていくだろう、と私個人としては危機感をもっているのですが、私以外に北海道にも水草を気にしている方々がいらっしゃると思うと、嬉しく思っています。（北海道の水草紹介になってしまってますみません。）

角野先生の講演では、11年間にもわたる調査結果から河川改修により単調な川になることで多様な生育環境がなくなり水草が消えていくこと、河川流域全体の生態系を考えなくてはならないこと、を示されました。また、水辺の国勢調査では水中の植物はあまり調査されていない、ということも指摘なさっておられました。長期にわたる地道な定点観察は説得力があると感じました。

多自然型川づくりや人工生態礁の話聞いて、花が目立つからと言ってキシノウズを植えたり、もともとその河川に生育していたかどうかかわからないような植物を移植したりすることに素人ながら非常に疑問を感じました。私も自然状態に近い沼で場違いな赤い花を咲かせた園芸品種のスイレンの一群を目にして驚いたことがあります。しかし、「多自然型」と銘打った事業が実際にどのように行われているのか、ということを知ることができました。関岡さん達の講演でお聞きした中池見での取り組みのように、人間活動と自然生態系との共存という点での意識は西高東低と聞いてはいましたが、その後の懇親会でそのような事業に使用する椰子マットや植物の苗などを販売する造園資材会社もあるということを知り、自分の勉強不足を恥じるとともに既に産業として社会の中に根付きつつあるのだということに驚きました。

最後は時間の関係上駆け足になりましたが、野口さんの栃木県の水生植物についてのお話は、か

なり綿密に文献を調べてしかも現地の様子も把握しておられるということで、野口さんはかなりの猛者らしい…ということがわかりました。各地域にこのように地道で熱心な方がいらっしゃることで支えられている部分は大きいと思います。特に、何十年も前からその地域に暮らして、人間活動の変化と植物の変化とをつぶさに見つめ続けているということは重要なモニタリングと言えるのではないのでしょうか。

講演が終わると、記念撮影の後、マイクロバスや自家用車で懇親会会場の中華料理店まで、初対面の方に囲まれ、社会人の方が多いいせいか始めはどうしたらよいのやら…という感じでしたが、大人の社交辞令はまずは名刺交換。そこから会話が進んでいくのでした。私の研究対象、コウホネ属に興味を持っておられる方もいらっしゃるって、やはり *Nuphar* に手を焼いた経験のある方は多いのだな…と思いました。学生の参加は少ないようでしたが、卒論でフロラづくりをするために船舶免許まで取得し、先輩と共同で船や魚探も購入したという方もいて、やはり私も高枝切りだけでなくもっと“採集兵器”を工夫せねば、と切に感じました。その他にも、様々な方と情報交換できました。

翌20日のエクスカーションは野口さんの案内で宇都宮近郊の河川巡りです。ただ…初めて参加する私は採集できるとはつゆ知らず、何も採集道具を持ってきていなかったのが悔やまれました。

宇都宮駅前のごみごみした感じがして宇都宮は都会だ…と感じていたのですが、一旦郊外に出るとタイムスリップしたようなのかな稻作地帯。小さな水路に澄んだ水が流れ、ミズニラが雑草として繁茂しているなんて!! 休耕田にはオモダカ属らしき植物が何気なく白い花を咲かせているなんて!!…と、感動の連続でした。

まず始めの野元川で、皆さんズボンの裾をたくしあげ、憶することなく川の中に入り、ノモトヒルムシロを探すも、それらしいものはあまり見つ

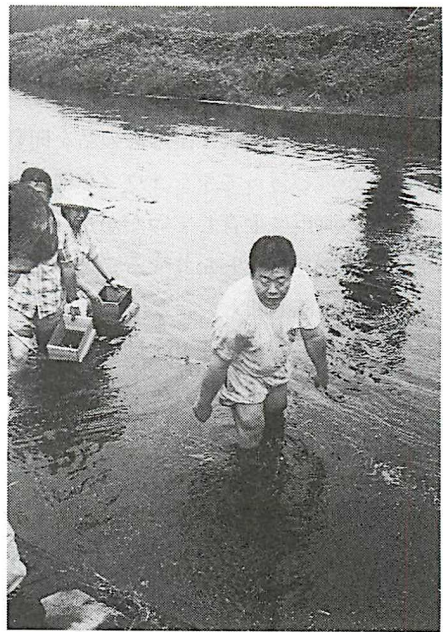
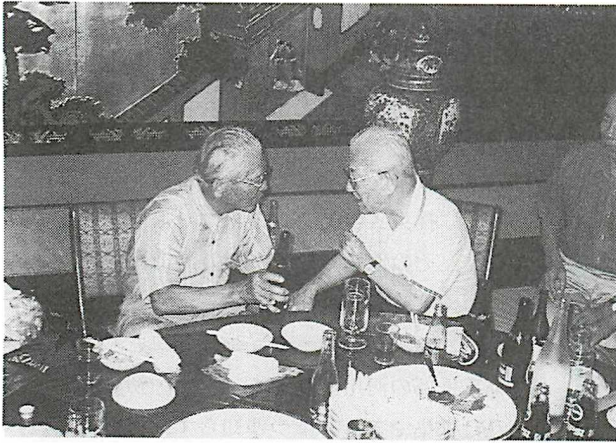
からなかったようでした。根古屋川では野口さん謹製の水中メガネでアイノコイトモを観察できました。何個か準備されたこのメガネは引っぱり瓶でした。昼食をいただいた公園の近くにはバイカモの群生地があったそうですが、標本を押していたら見に行く時間がなくなってしまい残念でした。最後の鬼怒ふれあいビーチでは、流行歌流れるにわかづくりの水泳場の人だかりを後目に、カラメドハギなど珍しい植物や湿地の植物を観察しました。ここの湿地はこのまま遷移が進むとなくなってしまいそうな気がしました。そして、待機していたバスに分乗して解散。

北海道には除雪の関係か水路（明渠）がありませんし、水田にこれほど水草が生えている場所を私はまだ見たことがありません。今回のエクスカージョンでそれだけ本州の水生植物の生育

環境が多様であることに気がつきました。今回案内していただいた場所以外にも、日光の中禅寺湖周辺や渡良瀬遊水池のある栃木県は“水生植物の宝庫”に思えてしまいます。是非ともこのまま残っていて欲しいと思います。

解散後、宇都宮駅の片隅にしゃがみ込み、なにやら新聞紙に緑っぽい物体を黙々と挟み込む学生が2名ほど出沒したそうです。幸い、職務質問は免れたようですが。

大会事務局として飛び回ってくださった野口達也さん、角野康郎先生はじめ水草研究会幹事の方々、お疲れさまでした。来年の開催地は決まりませんが、是非ともまた参加したいと思います。…その前に、会報に何か書きたいものです。



【左上】懇親会で語らう加崎英男会長（右）と岩村政浩氏（左）
 【左下】エクスカージョン（野元川）
 【右】今回の全国集会の御世話をいただいた野口達也氏